平林たい子
圓地文子集

40

現代文学大系

平林たい子
圓地文子 集

現代文学大系　40

筑摩書房

現代文学大系40　平林たい子　圓地文子集
昭和四十年九月十日発行

著　者　平林たい子
　　圓地文子
発行者　古田晁
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三
装　幀　真鍋博
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

平林たい子集　目次

地底の歌　五
こういう女　一〇四
嘲る　一二七
施療室にて　一五六
盲中国兵　一六九
鬼子母神　一七三
私は生きる　一七九
人生実験　一八九
人の命　二一一

圓地文子集　目次

花散里　二二五
ひもじい月日　二〇四
黝い紫陽花　二二八
男のほね　二三八
妖　二四六
二世の縁　拾遺　二六一
耳瓔珞　二七四
東京の土　二八八

冬紅葉　四〇五
老桜　四一六
仮面世界　四三七
年譜　四六六
人と文学　小松伸六　四八一

口絵写真提供（圓地文子）講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平林たい子集

ジョルジュ・サンドと日本の婦人作家

平林たい子

百年まへのフランスのジョルジュ・サンドがしたあの奔放な行動に似たことを百年後の日本の大正昭和の婦人作家がしたといふことは興味あることだ。

まさか、フランスと日本との歴史の段階に百年の差があるわけ〜はないからうが、百年をへだてゝ、何か共通したものがあるにはちがひない。

地底の歌

ある思春期

それはまだ大戦争一年目のことだったから清潔な省線電車が窓硝子をぴかぴか光らせながら向うの森かげを通った。そのひびきは駅に近づく時と駅から出るときとに微妙な抑揚があって時々ふと交響楽の一節のようにきこえることがあった。

晴れた午後の伊豆家の応接間ではトキ子のつれて来た学校がえりの友達が、三人思い思いの行儀悪いポーズで革椅子にかけていた。

「ねえ、ねえ、こんどの体操の先生が姿勢直しにそばにくるととても煙草くさいような変な匂がすると思わない？」

娘としての発育にどこかひ弱い所のあるトキ子は、異性の匂の強さなどがぴんぴんこたえる娘だった。

「煙草の匂位ならいいけれどあの先生ってば、姿勢を直すような顔をして一人一人のお乳にさわって行くのよ」

と言うのはカフェの娘の山田花子だった。

「へへえ！　ほんと？」

残りの三人は大変な人間生活の秘事に触れた顔付で火花でも散りそうな目ざしを見合わせた。

「お乳ってば私この頃毎日お乳が痛くてしようがないわ。さわってみると芯がだんだん大きくなっているのよ」

トキ子は今までの浮々した調子ではなく真剣に訴えた。

「それはね、貴女がいじるからよ」

カフェの娘の山田花子はこういうことでも物知りだった。トキ子は図星をさされて子供っぽい調子で打明けた。

「いけないとわかっていてもついいじっちまうの。夜は寝巻が着物だから脇があいているでしょう。だからいつのまにかふところ手していじっているのよ」

「だけどもお乳はいじるからだんだん大きくなるんじゃない？」

製薬会社の社長の娘だという市川松江が口を出した。

「じゃ貴女もいじったのね」

「皆いじるのよ」

市川松江は、既にそういう時代は通過して来た目つきで、落着いて断定した。

「それについてはおかしいことがあるのよ。私のお乳少し出るのよ」

トキ子は今朝の驚きを喋らずにはいられなかった。今朝、トキ子は乳の疼きで気持がふさいで仕方がないので、制服に着換えるとき乳房を出して調べてみた。この頃大分重く

なって来た乳房を片手の掌で支えて暫く調べ廻しているうちに、ふとしたいたずら心で指に力を入れて上向いた乳首をきつく絞る真似をした。すると苺の膚みたいな乳首の穴穴からちらと光る雫が泌み出した。

何とも言えない驚きで奇蹟を見るようにトキ子は目を瞠った——

しかし、実際のところ、トキ子よりませている皆にはこんな打明話は大した興味ではなかった。

彼女達は自然に喋り疲れて、制服姿で赤い絨毯の上を歩き廻った。上衣のセーラーと袖のカフスをふちどる白線が隅から隅まで走らず途中で流星のように消えているのがこの女学校の制服の特徴だった。スカートも普通の制服よりはずっとこまかい棕梠の葉のような襞で、歩くと腰のあたりでさざめくように崩れてゆれるのが粋だった。この制服だけに憧れてここを志願してくる娘もある位で、一体に華美でハイカラだが、学力からいえば、一流校を落ちて来た生徒が多かった。

山田花子は、はじめて訪れたトキ子の家の応接間の派手な雰囲気をとりわけ物珍しそうに見廻した。

赤い絨毯といい、ゆったりした革椅子といい、金高をじかに喋っているような趣味のものばかりだった。何でも豪奢でなくてはならない調和から、当時流行の日の丸の額さえ唐草模様の地紋のついた布団のような厚ぼったい緞子の額ぶちに収めて掲げてあった。

しかし、それと向い合わせに掲げた、小猫の球に戯れている版画は、これはまた、恐るべき趣味の貧弱さだった。それに彼女達が来る前から卓上に頁をひらきかけになっている本が夜店で売っている「赤城の夜嵐」であるのも変だった。

「これは珍しい川田屋の父っつぁん、月夜たあ言えこの山道をようようたずねて来ておくんなすった。忠治ぁ厚くお礼を言うぜ」

というあの悲壮な会話が、一本刀大たぶさの忠治らしい挿画のあるページに大きい活字で見えていた。

「貴女のお父さんの御商売ほんとうは何なの」

山田花子は、茶の間にいるトキ子の母を意識して、小さい声でトキ子にたずねた。

「貴女は前に侠客だなんて言ったけれど侠客なんて商売はないんてすってよ。私はお父さんに聴いたんだけれど、侠客っていうのはね……」

と言いはじめておいて、

「ああ、やめとこう。やめとこう。憤られたら大変……」

意地悪くロをつぐんだ。

トキ子は、山田花子がそれを言出した瞬間、カッと赫くなって彼女の顔を見つめていたが、急に崩折れたように下を向いた。

「いいわ！　やめなくたって。私には貴女の言おうとしていることなど、ちゃんとわかっているんだから——意地悪

ね」

ぱっと一光り光ったトキ子の目には、もうセロファンのような涙が薄らと光っていた。

そのとき門を入って来た一人の丈の高い青年が、玄関を訪れずに応接間の窓の外を通って庭の方へずかずかと入って行った。

「誰？　あれは家の人？」

「ちがうわ……」

いつのまにか涙を乾かしたトキ子は、何かの意味を含めた潤んだ目ざしで笑っていた。

「ああわかった。あれが貴女のよくいう鶴田さんでしょう。きっとそうよ。きっとそうよ。あれ、あんな顔するもの」

「だけどハンサムね」

「ハンサムだわ」

皆は共鳴し合って祝福するようにトキ子を見た。トキ子は一寸した空虚を抱きながら素直にその空気の中に浸っていた。

皆一人ずつが一人ずつの胸にかざる花のような見栄で抱いている異性の名前がある。トキ子も人並な見栄で鶴田光夫の名をよく口にしていたが、自分の妻に素人女は適当でないと思っている当の鶴田からは、格別の視線を受けとったことさえなかった。強いていうなら、トキ子自身も人を愛するということが、どれほど心と体の燃焼であるかを知っていはしないのだった。それを知らずに弱い体と心とから放つ月光のような光を、鶴田にそれとなく投げかけて一人で満足しているのだった。

いれずみ

鶴田光夫は庭さきに突っ立ったまま癖の吃りで軽く吃りながら、

「暑い、暑い……親爺さんは留守？」

「いいえ、さっきから馬事協会で乗馬ですよ。迎えが来たものだからね。何か急用？」

茶の間で髪を結っているトキ子の母の里子が「迎え」という所にアクセントを置いて、いかにも満足らしく言った。馬事協会の馬の管理をしている男の弟が伊豆一家にいたことがあり、よくあることで伊豆の貸したハコを取もどしに行ったまま拐帯逃亡した。しかし兄は弟の分までの尊敬をもって親爺さん親爺さんとなついて来るのであった。

鶴田は、里子のそんなこまかい気分なぞ覆没させる事務的な調子で、性急に玄関番の三下を呼んだ。

「一郎、すぐ呼んで来い。夕方大山さんが代々木に来るって使が来たんだよ」

「大山さんが代々木へ？　へえ珍しいことだね。何だろう……」

軍の信任が厚く、三十何歳の青年で天津に大山機関を設けている大山定行が、何の用事で一伊豆の所に自らわざわ

ざ——

しかし鶴田はいつもの癖で、横から口を出す里子には詳しい事情の説明なぞする気にならなかった。それに手入れ以来、いかに代々木の賭場に毎日行けない事情があるとはいえ、伊豆が乗馬に行っているのにも心に逆うものがあった。

「ああ暑い、とにかく暑い」

鶴田は腕さきまで彫ってある刺青をかくすために、長袖のワイシャツをめくりかえしもせず手首まで着ていた。まだそのさきに青く現れる部分にも繃帯を巻いていた。その青々した両腕をここでは肩までめくり上げて扇をばたばた煽いだ。

花の部分に白粉をつかって御殿桜を一面に浮出させた腕の彫りものは平生は目立たず、熱気や酒気で膚がほてるとちょうどよい赤さにほんのり浮き出す工夫になっていた。だから今その桜は急に皮膚の底から浮び上ったようにかっきりした欠け目のある五弁の花片をちらして、肩の息づかいと一緒に生々しく息づいているのだった。

ちょうど帰りかかったトキ子の友達は、廊下と茶の間を越して、庭さきの鶴田をそっとのぞいた。

「ちょっと！　きれいだわね。まるでインクで書いたみたい」

市川松江は低い感嘆の声で山田花子のやわらかいスカートをつついた。教えられるまでもなく山田花子もじっと黒い焔の燃える目で鶴田を見ていた。若い男性の肌をくまどる青と桃色のまだらは、成熟した山田花子の目で見ると、ただ綺麗というよりもっと別な激しい複雑なものだった。山田花子は大胆な物怖じしない目をはなさず見ていた。

そのとき使いから帰った三下の一郎がズボン下だけの裸でその廊下を通った。まだ十八歳にしかならない一郎の背にも筋彫りで般若の面がほりかけになっていた。

「びっくりするわね。——だけどよく見ればそんなに気味悪いものじゃないわ……でもどうしてあなたの家の人達皆あんなにいれずみするの」

トキ子は山田花子がそういう口調になるのはまださっきの意地悪い質問の気持がつづいているからだと思った。

「どうしてって別にわけはないわ。家の知っている人にいれずみする商売の人があって、彫ってくれるからよ」

「いれずみする人知ってるの。へえ、珍しい。見たいわね。いれずみってどうして彫るんだろう」

「つれてって見せてあげようか。学校のそばなのよ」

トキ子は気弱くそんなことを言ってしまった。

「ほんと？　つれてって。ほんとよ。いつ？」

トキ子は自分の言出したことにすぐその瞬間から後悔していた。しかし、事の大小につけ実行力のある山田花子との約束であってみれば、何れ実行しなくてはならないのだった。

作者註　三下は子分中の軽輩。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ハコ云々、ハコを貸すというのは博奕場でテラ銭の中から金を貸すこと（呉れる場合も含めて）。

「いれずみ見に行くの今日にしない？　ちょうど井上先生の写生の時間が最後だからエスケープして」

土曜日の朝山田花子は校庭で早速トキ子に囁やいた。

「何か変化がないと、私くさくさして仕方がないわ」

「授業中に行くの？　すんでからだっていいじゃないの。今日なら」

「でも、井上先生だからずらかっちゃおうよ。この前の写生の時間だって私画をかかずに『結婚の生態』をよんでいたの。だから画用紙に以前つくった詩をかいて出したのよ。そしたら却ってずいぶんいいお点を下さったわ。とても話せる先生だから知れたって叱られはしなくてよ。普通にできることでも冒険にした方が何でも面白くなるんだわ」

「山田さんの冒険にあっちゃ先生も敵わないわね。家政の先生はこないだ口惜しがって泣いたそうよ。『家具の艶出し法』っていう問題がばかばかしいからって丸をかいて答案出すんですもの。……でもね、男の先生はニヤニヤ笑って何も言わなかったんですって」

市川松江はそういう山田花子を崇拝する目ざしで説明する。白いほどよく晴れた空をひばりが酔い痴れたように鳴きながら横とびしていた。

話がきまったので山田花子と市川松江とトキ子とは、門外に写生に行くような顔でそっと校門をぬけ出した。

踏切を越えて十五分と行かずに旧い街道沿いに出た。すると銅の天水桶も格子戸も飯櫃のように磨き立てた腕文の家のかまえがもう見えた。トキ子達のあとを追う形で、少し派手すぎる青ズボンに白シャツの青年がやっぱり腕文の家の方に歩んで来た。

「おや、今日は何？」それは、トキ子の家にもちょいちょい来るダイヤモンド冬だった。

「何でもないわ、見に来たのよ。あら！」

トキ子はかえって腕文の敷居がまたぎよくなったのを喜んで一緒に玄関に入ったが、見ると冬の片腕はフットボールみたいに腫れ上っていた。

玄関正面の大神棚に潔い燈明の燈火がゆらゆらゆれていた。室内は若い女の気配で急に膨脹して柔い香がこもった。

「何だ、いやに大勢じゃないか。君の連れかい」

「いや、そうじゃないんだがね。見たいんだとさ。見学だね」

トキ子は、何となく気むずかしい腕文への口添えの気持が冬の言葉に加味されていたのでホッとして坐った。やくざ上りで左の片腕のない腕文は片袖ブラリとして半袖シャツで「古梅園」と書いた墨をすりながらギロリと三人を見廻した。

「さあ、娘さん達の前でおとついみたいな音をあげたら笑われるぜ」

「だけど今日そこの銭湯は休みなんだね。いやになっちゃ

うな」
「銭湯がなくたって蒸しタオルで沢山だい」
腕文はいれずみ図案の綴じを卓の上から片づけて、うしろの小箪笥から箱をとり出した。
「この前の所はいやに腫れ上ったね。はね針は腫れるからね。じゃ、今日は左手に黒のぼかしだ」
二十歳位のダイヤモンド冬はシャツの袖をめくり上げてかしこまった。
自分の名前にちなんだダイヤのクイーンが筋彫りだけで両腕にあらまし出来上っていた。
冬は、もう最初の刺戟を待ちうける表情で、畳に伏せた目ざしが畳に突き刺しそうなほど力をこめていた。
「何だい意気地のないその恰好は。ここは体中で一番痛くない所なんだぜ。近頃の若い人ときたらみんなこれだからね」
箱の中から、針がとり出された。それは何の変哲もない裁縫の絹針を何本か不揃いに束ねたものだった。腕文は針の束と一緒に墨を含ませた筆を片手に持って、なれた指つきで指の間に挟んだ。
「この側だと手くらがりになるね」
腕文は針と筆を一本の手で持って観念して坐っているダイヤモンド冬のまわりを半分廻った。
ちょっと殺気を含んだ一瞬の間を置いて、針は弾力のある若い肌に充分突き立ったと見えた。そのしるしのように、たらたらと細い糸になって血が垂れて来た。腕文は卓上の汚れた雑巾みたいな布でそれを拭いて尚針をつき立てては筆の墨をさした。
「一寸待った。一寸待った。今日は特別痛い。坐り直して腹に力を入れるからね」
いつのまにかトキ子の小さい細い顔が紙のように青ざめていた。ふらふらと目まいを感じながら彼女は立上って、縁の方に歩んで行った。市川松江もそれを見ると逃げるようにあとを追った。
何のために、どうしてこの苦悩を味って、若い肌を傷けなくてはならないのだろうか。美のためにかしら、それならもっと巧い画かきに画をかいて貰ったらよかろう。それでは洗うと消えてしまうからかしら。膳や椀の画だって洗った位で剝げはしないではないか。剝げないだけにその画を押える薬品がこの世にないとは思われないではないか。
――二人の罪のない娘たちの頭脳には思索とも言えないようなこんな思索が断片的に現れたり消えたりした。
しかし、あとの三人は、蛭のように現実に吸いついた姿で、それぞれの目と指と感覚とを無惨な上膊の一点に集めていた。
特に山田花子は、肉づきのよい派手な顔をぽっと赤くして、
「ふう」
とかるい官能的な溜息をつきながら、血が粟粒みたいに

噴いて玉になって行く針のさきを貪るように見つめていた。
やがて、内儀さんが湯を入れた洗面器を持って来て、傷痕をタオルで拭いた。
「見ろ、君が刺すとき縮むようにするもんだから、ここが変になっちゃったじゃないか」
一たん刺した箇所から吹き出してくる血やにをふいて、腕文はさらにその上を修正して行った。
痛い痛いと言いながら、娘達への見栄と若い元気でダイヤモンド冬は一彫り一寸四方を三彫りも彫った。知らない間に時間がたって、血のついた針のある卓上が西陽で明るくなった。
いつのまにか山田花子はあつい蒸しタオルを絞って、ダイヤモンド冬を頻に介抱していた。
「湯に二、三遍入るとこの痛みはずっと凌ぎよくなるんだがね。何しろ今日は休みだから仕方がない。ああ痛い。ああ痛い……」
「大丈夫よ。私が何度でもタオルを取替えて上げるから。そう痛い痛いと言ったらおかしいわ」
いま黒い墨を吸ったばかりの痛々しいささくれた膚も西陽で照らし出されていた。山田花子は何かの匂いのする断髪をよせてその傷口のタオルを取ったり載せたりしてやった。
「いい度胸のお嬢さんだね。これは目っけものだ。へっへっへっへっへっ」
腕文は過去の生活経験の臭気を含んだ笑を山田花子の顔に向けて笑った。
「どうだい。やくざは好きかい」
腕文は血のついた片手で煙草を吸いながらぜいぜいと咳き込んだ。脂気の抜けた瞼の下に名人気質と残忍とが一緒になったような光った目が動いていた。
「やくざってなによ……」
山田花子はとぼけているのかほんとに知らないのかわからない無表情で、「やくざは好きか」という腕文の問いに反問した。
「やくざってダイヤモンド冬さんのような粋な博奕うちのことよ」
「そうねえ。そんなに嫌でもないわ」
山田花子は慣ったような不愛想で答えた。その答をきくと、ダイヤモンド冬は少からずてれてにわかに口笛を吹きはじめたし、腕文は咽喉に浮いた幾筋もの筋をみんなたるませてわっはわっは笑い出した。
「それじゃ冬さんにでもたのんでお嫁さんにして貰うんだな」
三人はダイヤモンド冬を入れて表に出た。
「冬さんお願よ。家のお父さんや若い衆さんに私達がここへ来たこと絶対に言わないでね」
トキ子は腕文にもしっかりたのんだそのことをまた繰返した。ダイヤモンド冬はトキ子の父の舎弟分たる吉田大龍

のそのまた舎弟分だった。しかし、吉田は博奕のシマをもっていないので月島の木戸という貸元の博奕場で、下足をとったり札を撒いたりの出方を手つだっていた。

街にはもう燈が入って駅から出てくる人かげが黒く刷いて見えた。

「お茶でものんで行こうか」

ダイヤモンド冬は、さっきからの空気が絡んでいるので、このまま別れるのが惜しかった。しかし、トキ子も市川松江もあわただしい夕暮の気配を見ると、いっぱしの不良ぶった気どりもはげて家長の恐しいただの娘にかえっていた。二人は、体つきでかえりたい気持を曖昧に見せて立停った。

「私は——きょうはなるたけおそくかえった方がいいんだがなあ」

山田花子は腕時計をふくらんだ胸のあたりに引きょせて見てから、例の黒い焔の燃える目でダイヤモンド冬を見つめた。

「きょうは家のお父さん所に女のお客さんがあるから私はおそい方がいいんだわ。もしかしたらその人がこんど私達のお母さんになるらしいのよ」

「じゃあ、どうしましょうか……」

市川松江とトキ子とは山田花子だけを残して帰ることにも躊躇していた。

「いいわ、二人だけさきにかえって。私お茶をのんで行くわ。かまやしないわ」

ダイヤモンド冬も、結局目標は山田花子だったから、だまって口笛をふきながら事がはこばれるのを待っていた。

「さようなら」

「さようなら」

トキ子と市川松江とは、駅の改札に並びながら、何となく後をふりかえった。と、新鮮な燈火が目を瞠るように光り合っている街を、白線の途中で消えたセーラー服と白シャツとが寄り添って暗がりに溶け込んで行った。

トキ子と市川松江とは思わず顔を見合わせた。

（ひょっとすると私達のまだ見たことのない恋愛っていうものに山田さんがとりつかれたのじゃないかしら？）

（さあ……）

といったような無言の会話をその目と目が交わしていた。

槍とドス

伊豆荘太親分に、天津の大山機関の大山定行がじかに逢ってのたのみというのは、河下百済という予備中佐の一身上のことだった。

河下は前大臣をピストルで脅かしかかってから一年あまり逃亡しつづけ、その間に、ある半官半民団体の公金費消事件も発覚した。そのため軍部華かな時世をよそに、以前右翼団体の幹部だったとき下に働かせていた大山をたよって近県から潜行して来たのだった。

「そんなわけでいま僕の事務所にかくれているんだが、警視庁が出せ出せと毎日来るんで煩くてね。いないいないの一点ばりで追いかえしてはいるものの向うはいることは知っているし、こっちも空々しくてうそが言えないんだ」
「なる程……」
「まあ、僕の所にいる以上めったに引っぱっても行くまいが、――そこでほかでもないが兄弟が一つ河下氏を置いとく所を見つけて貰えば、大変都合がいいんだよ」
「そんなことですか、ようがす。わたしが本人を保護しましょう。なあに、移す必要なんざありません、事務所に置いときなさい。本庁が来ても絶対に上へは上げませんよ」
「大丈夫？　それがやりとげられれば僕としてはその方が面白いんだけれどねえ」
「できますとも。何のためにああやって私が命知らずを平生遊ばして食わしとくと思うんですか。みんなこんな時のお役に立てたいからですよ」
あまり口の巧くない伊豆がその晩は、精いっぱいの言葉でお世辞を言った。
そのくせ、大山と伊豆と一緒に兄弟の杯を交わしたも一人の吉田大龍の名は、口の端にものせなかった。
吉田大龍は埼玉の方の親分をしくじって上京以来、伊豆と浅草で兄弟の杯をして、さらに大山と杯を交わし、二人で若い大山定行の扶持を貰う身分だった。しかし、伊豆の威張るのにくらべて吉田は腰が低いので、大山は自分が天津在勤中吉田を自分の「青年隊」の宰領に任じていた。
今までの所では二人が一緒に大山の杯を貰っていながら、伊豆には大山は冷淡だった。冷淡以上にどこか性格で弾き合っていた。
しかし、今これでいよいよ好機がめぐって来た。ここで実力を見せて、いやでも伊豆の存在の重要さを大山定行に承認させなければならない。
銀座でしたたかのんで、伊豆と子分の鶴田とは大山の自動車にのせて貰って途中の中央線駅で下された。その駅から二人はまた電車にのった。
「さあ当分の仕事ができた。あしたの朝は非常召集だぞ」
つり皮につかまった伊豆の小さい体の隅々には、小魚のような精力がピンピンはねていた。
「そうすると博奕場は休みますか。ここで休むとあのシマはますます仕様がなくなりますがねえ」
「一体どうなんだい。今日なぞちったあお客が集ったのかい」
「だめなことは全くだめです。摺れっからしばかりで金はないしね。こないだ手が入ってこのかた、素人というものが全く来なくなっちゃったんですよ。今来ている奴らと来たら、逆にこちらを食おうとしているんですからあきれた野郎どもですよ」
「それじゃ休みだ。文句はないじゃないか。それに夏場は博奕はだめときまっているんだし、ちょうどいいよ」

理窟は親分のいう通りであった。しかし、困難にぶつかると、すぐ事をときほごさず捨ててかかる伊豆の性質が見えているのが、鶴田の心に許せないのだった。

翌朝伊豆荘太は早起きのいつもに増して早く起きた。

「おい、こら、起きろ。いつまでねていやがんだい」

伊豆はまっ先に玄関に行って、三下の一郎のねている枕を蹴とばした。一郎は自転車で近所のアパートの子分どもを起し廻った。伊豆は冷水摩擦をすますと艶のある肉のしまった体で亜鈴をふった。そこへ鶴田がのそりと入って来て、刀の簞笥の前に立った。

「道具はドスと槍だ。柄が滑るから見ておけ」

「ええ、それはいま布を巻きますが、槍をもって行くんですか」

「槍がいいよ。その位のやま気は利かしておかなくっちゃ向うはこたえんよ。いよいよとなったらおれがあれを振廻してやるんだ」

「驚きましたね。槍と来ては少々……」

鶴田は伊豆の芝居気を笑いながら、新井見番という名入手拭を幾筋もばりばり裂いて白鞘の古刀と槍の柄を巻いた。朝飯がすむと伊豆一家は一台の自動車で山の手の古い邸宅の大山定行事務所にのりつけた。びっくり鉄、本ちゃん、正坊、鶴田などだった。

自動車の音では神経質になっている大山の書生が、格子窓に顔をよせて覗いていた。

「よし、皆ここに待っておれ。鶴田だけ来るんだ。鉄、道具だけどこかその硝子戸の中にでも入れておけや」

六畳もあろうかと思われる広い玄関のたたきで気ぜわしく指揮してから、古めかしい式台で二人は靴をぬいだ。正面の突当りを右に折れて、大山個人の私室になっている十畳間の前に出ると鼻髭の垂れた色の青い五十がらみの男が、樹木のある庭あかりの明暗を半白の横鬢に受け[illegible]がら畳廊下を歩んでくる所だった。

「先生！　河下先生、お久しぶりでござんす。このたびはとんだ御災難でさぞ御苦労を……」

「おう、伊豆さんだな。御苦労」

「先生、たしかにお引受けしました。この伊豆がお引受けした以上は、どうぞのんびりとお寛ぎを……」

伊豆だけ中に入っていたらどうかという河下のすすめで、鶴田と本ちゃんとびっくり鉄の三人が玄関のたたきに椅子を出し、正坊を台所の通用門の見はりにした。

「こんなことなら、講談本でも持ってくるんだったな」

びっくり鉄は古めかしい市松型に木を組んだ暗い天井を見上げて、きょう一日の単調を思いやる目つきをした。真新しい手拭なぞ巻いた道具を揃えて乗込んで来た気分では、すぐに緊張した何かの場面がひらけるものと鉄は思っていたらしかった。

「ばか野郎、下足番とはちったあちがうんだぞ、講談本をよみながらつとまるかい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c